

- Reibel, D.A. and S.A. Schane (eds.). 1969. *Modern Studies in English : Readings in Transformational Grammar*. Englewood Cliffs, N.J. : Prentice-Hall, Inc.
- Ross, J.R. 1968. *Constraints on Variables in Syntax*. Ph.D.dissertation, MIT. Bloomington, Indiana : IULC.
- Steinberg, D.D.and L.A. Jakobovits (eds.). 1971. *Semantics : An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Takami, K. 1987. "Adjuncts and the Internal Structure of VP." *English Linguistics* 4, 55-72.
- 1992. *Preposition Stranding*. Berlin : Mouton de Gruyter.
- 高見健一. 1994「言語の機能と階層性」『言語』23巻3号, 76-83.

に続く前置詞句が VP の内部にある場合に前置詞が残留しない(26)のような表現についても、再分析を随意規則とするだけでは不十分である。Hornstein-Weinberg (1981) は、関係節において、前置詞が前置と残留の両方が可能な場合については何も説明することができない。即ち、Hornstein-Weinberg (1981) の分析は不備であり、それを補う原則が必要である。その原則として長原 (1990) が提案した新情報・旧情報に基づく前置詞の残留と前置の使い分けの原則は、十分な検証はできなかったが、前置と残留の事実も説明する自然な説明力をもつ原則と考えられる。

REFERENCES

- 荒木一雄・安井稔 (編). 1992. 『現代英文法辞典』三省堂.
- Bresnan, J.W. and J. Grimshaw. 1978. "The Syntax of Free Relatives in English." *Linguistic Inquiry* 9, 331-91.
- Chomsky, N. 1971. "Deep Structure, Surface Structure and Semantic Interpretation." In Steinberg & Jakobovits (eds.) 1971, 183-216.
- _____. 1977. "On WH-Movement." In Culicover et al. (eds.) 1977, 71-132.
- _____. 1980. "On Binding." *Linguistic Inquiry* 11, 1-46.
- _____. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.
- _____. 1982. *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Culicover, P.W., T. Wasow, and A. Akmajian (eds.). 1977. *Formal Syntax*. New York: Academic Press.
- 福地 肇. 1985. 『談話の構造』新英文法選書第10巻, 大修館書店.
- Hornstein, N and A. Weinberg. 1981. "Case Theory and Preposition Stranding." *Linguistic Inquiry* 12, 55-91.
- Jackendoff, R. 1972. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- _____. 1977. *X̄ Syntax: A Study of Phrase Structure*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Kuroda, S-Y. 1968. "English Relativization and Certain Related Problems." *Language* 44, 244-66, Reprinted in Reibel & Schane (eds.) 1969, 264-87.
- Larson, R.K. 1985. "Bare-NP Adverbs." *Linguistic Inquiry* 16, 595-621.
- 長原幸雄. 1986. 「関係節における前置詞の前置と後置」『英語青年』132巻6号, 22.
- _____. 1990. 『関係節』新英文法選書第8巻, 大修館書店.
- 中島平三. 1994. 「ことばの階層性を捉える」『言語』23巻3号, 26-33.
- Quirk, R. et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- _____. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

当てはまるものの選択の過程が既に済んだものとして表現する場合と発話の時点でこの選択を問題にする場合とで、これらを使い分けていると考えることができる。前者の場合には、選択の過程が済んでいることから、関係節を含む名詞句全体としては他の名詞句で表わされるものと対比されないものを表わすことになる。

前者の場合に、関係節を含む名詞句全体としては他の名詞句で表わされるものと対比されないものとは、つまり、旧情報を表わすということであり、この場合には前置詞は前置される。後者の場合、即ち、発話の時点でxの選択を問題にする場合には、関係節を含む名詞句全体としては他の名詞句で表わされるものと対比されるもの、つまり、新情報を表わすということである。この場合には前置詞は残留する。

最後に、長原(1990)は、関係節の空所が変項となるのはそれが新しい情報の位置である場合と考えられると述べて、次のように締め括っている。¹⁾

このように見てくると、前置詞の目的語の位置にはもっぱら新しい情報を表わす位置、もっぱら古い情報を表わす位置、どちらも表わせる位置とがあり、(15)、(26)、(31)に挙げたように表現によりどれを取るのが自然かが決まると言えそうである。

長原(1990)の提案する関係節における前置詞残留と前置の使い分けの原則とその説明は、説得力のある自然なものと考えられる。

4. 結語

Hornstein-Weinberg (1981) の分析は、関係節において、(6)に挙げられたような慣用句を成す表現の場合、前置詞が必ず残留する例を派生することができる。しかし、単に再分析を随意規則とするだけでは不十分である。このことは、自動詞、形容詞の後に前置詞が続く(15)のような表現についてもあてはまる。しかしながら、(6)、(15)のような表現について本当に説明を与えることにはならない。次に、Hornstein-Weinberg (1981) の分析は、関係節内の VP の外に生じる、時や場所を表わす前置詞句が必ず前置される事実は説明することができる。しかしながら、Hornstein-Weinberg (1981) の VP 内部の構造の分析は、厳密性に欠ける。様態の副詞としての前置詞句が VP 内で補部として機能する(23b)のような文に対応する関係節においては、事実反して前置詞が残留することを予測してしまう。これも又、Hornstein-Weinberg (1981) の VP の構造分析が不十分であることに起因すると考えられる。自動詞、形容詞

1) 長原(1990, pp.171-72)

を表わす名詞であり、複数形も取らないのであるから、個体を表わさない。この場合、前置詞の前置された *in/to which* の形の関係節のみが許されている。次の例においても、前置詞は前置されている。

- (34) a. Rose had been horrified, for there was no room in her little house to establish so large a lady, and no possibility of being able to provide for her *the standard of living to which she was accustomed*,
b. I had then lived for two years in a flat on Primrose Hill, which, though not of *the classical and aristocratic grandeur to which I was accustomed*, had a visual cachet of its own.

ここでの前置詞の前置も先行詞の *standard of living, classical and aristocratic grandeur* が個体とは考えられないからといえる。

長原 (1990) は、又、個体を表わすか否かの基準について、次のように述べている。¹⁾

しかし、名詞がここでいう個体を表わすか否かの判断基準を明確にすることは今後の課題として残る。例えば、抽象名詞と思われるものでも、(35)のような例があるので、個体を表わすといわねばならないであろう。

- (35) I therefore cross my legs so my left leg will be higher, left over right. I always have, and now it's *the only position I'm comfortable in*.

長原 (1990) は、更に、次のように説明を続けている。²⁾

又、変項としての解釈が当てはまるといえる場合でも、そう考えない方が良くと思われる場合がある。例えば、John が愛しているのは Marry であるということを話者も聴者も知っていて、Marry の名前に言及するのを避けるために「John が愛している女性」という場合には、“「John が x を愛している」の x に当てはまる女性” といっているものとしても誤りではない。しかし、誰が x に当てはまるかの選択は既に発話の時点では済んでいるのであるから、そのことを表わす、空所を変項とはしない解釈法があってもよい。又、特にその解釈を必要とする言語表現があっても不思議ではない。英語では関係節の空所が前置詞の目的語である場合に前置詞の前置と残留の 2 つの形があるので、x に

1) 長原 (1990, p.170)

2) *ibid.*, pp.170-71.

- (33) She lay awake a little while longer, thinking these things, and looking around the dark room. It was dark, but one could see the objects in it quite well, because there was a street lamp outside Mrs Flanagan's next door, and the light entered the room through the thin cheap floating curtains. There was a flowery pattern on [the curtains of which she had grown extremely fond], and she could hardly now believe that she had once disliked them.¹⁾

(33)の the curtainsは、前の文に生じている the thin cheap floating curtains であるから、明らかに旧情報を伝えている。²⁾ そして、旧情報を伝える名詞句の位置、即ち、the curtains 以下の名詞句の位置において、関係節の前置詞は、前置されている。

次に、長原（1990）は、何故このように前置詞を前置させた関係節と残留させた関係節が使い分けられるのか、又、2つの形の使い分けが何故(31)に挙げたような表現に限られるのかを問題としている。そして、前置詞が残留する場合と前置する場合では関係節の空所の名詞句の性質が異なり、その性質に応じて前置詞が前置されたり、残留したりすると考えている。(31)に挙げたような表現はこれらのいずれの性質を持った名詞句も取れるのに対して、(15)、(26)に挙げたような表現はいずれか一方の性質を持った名詞句しか取れない。つまり、問題の空所の名詞句の性質が何であるかが分かると、全ての問題が解決すると考えている。次節では、長原（1990）がこれに当たるかもしれないと思われる考え方として示している考え方を検討する。

3.2. 変項としての空所

長原（1990）は、関係節の空所の名詞句の性質について、次のように説明している。³⁾

制限関係節を含む名詞句は、空所が個体を変域とする変項と考えて、“関係節...x...のxに当てはまるNのメンバー” という意味に解釈される。しかし、この解釈の仕方は制限関係節と呼ばれている全てに当てはまる訳ではない。

上の解釈法が当てはまらない場合として、(21)に挙げた extent, manner などの例がある。これらの名詞は1つの抽象的なスケールあるいはスケール上の点

1) Margaret Drabble, *The Needle's Eye* (Penguin Books), p.60.

2) 新情報・旧情報に関しては、福地（1985）を参照。

3) 長原（1986, p.22）, 長原（1990, pp.169-70）

それらについて何も説明できないのであるから、Hornstein-Weinberg (1981) の分析は不備である。

Hornstein-Weinberg (1981) の提案が(15), (26)にみられる表現の分析に関して不十分であり、(31)の表現についても説明することができないのであるから、何らかの原則を補う必要がある。長原 (1990) は、書物に現われた文脈に応じた使い分けの原則を提案している。次節では、その提案を検討する。

3.1. 新情報と旧情報の位置の名詞句

長原 (1990) は、関係節における前置詞の残留と前置の使い分けについて、次のように述べている。¹⁾

名詞句の位置には新しい情報を伝える位置とそうでない位置とがある。前者の位置に起こる名詞句は他の名詞句との対比の上で用いられるのに対して、後者の位置に起こる名詞句にはそのような対比がない。前置詞を前置させた関係節と残留させた関係節は、このような名詞句の位置に応じて使い分けられているようである。つまり、前置詞を残留させた関係節は新しい情報の位置の名詞句に用いられ、前置詞を前置した関係節は古い情報の位置の名詞句に用いられる。

このことを示している例として(32)の the chair 以下の名詞句が挙げられる。

- (32) a. Her children were stupid, her husband was drowned, her servants were thieves, and [the chair she sat in] was uncomfortable.
- b. He insisted sharply upon Jack's sitting in [the chair in which he himself had been sitting], and then went and sat on a radiator.

前置詞を残留させた関係節を用いた (32a) の chair は、文脈から明らかなように、chair に限らず彼女に関係のあるいろいろな人や物の中から選ばれたものである。一方、前置詞を前置させた関係節を用いた (32b) の chair には、他の椅子との対比もない。この椅子が関心の対象であることは既に決まっている (つまり、他に空いている椅子はない) こととして、それに誰が座るかが問題とされている。そのように解してはじめて and then 以下の部分が理解できると思われる。

次の例は、前置詞を前置させた関係節を用いた例である。

1) 長原 (1990, pp.167-68)

- (27) The point I want to make here is that what is commonly called 'standard English' in this sense contains a lot of forms which would not normally be written and which suffer at school from the usual concentration on written language *to which we have already referred*.
- (28) Such languages start with the male-female sex distinction that is applied to living things,...; then they generalize the distinction to include everything *which they can refer to by using a noun*,....
- (29) ..., and I think it is important for linguists to go on developing (and abandoning) packages, as long as they can avoid the negative effects *that I have just referred to*.
- (30) This is especially puzzling in view of the fact that many of them are schoolteachers and should know the children *they are referring to* pretty well.
- (31) care about, be concerned about, arrive at, hint at, mock at, search for, be interested in, approve of, complain of, hear of, be aware of, be fond of, rely on, agree on, belong to, listen to, return to, speak to, talk to, write to, refer to, be accustomed to, deal with, be familiar with, be concerned with

前置詞を前置した形と残留した形の相違については、長原（1990）が指摘しているように、文体上の問題であって、前置詞を前置した形は formal であり、残留した形は informal であるといわれている。¹⁾しかし、長原（1990）は、一人の著者が異なる文体を同時に使っているとは考え難い学術書などにおいてもよく両方の形が現われるのであるから、少なくとも文体以外の要因も係わっているといえると述べている。²⁾長原（1990）が引用している(27), (28), (29)及び(30)は同一の著者による同じ著書からの用例であり、前置と残留の使い分けに文体以外の要因も係わっていると考えられる。

Hornstein-Weinberg（1981）の提案は、前置詞の前置と残留の使い分けについては何も言及していない。しかし、実際に使い分けられている用例があり、

ard Hudson, *Invitation to Linguistics* (Oxford : Martin Robertson, 1984), p.45, p.79, p.128及びp.49から引用されている。

1) Quirk et al. (1972, pp.863-71, 1985, pp.1248-50, pp.1252-53)

2) 長原（1990, p.33）

(23a) は非文法的であるから, *in a thoughtful manner* は (23b) にとって必須の要素であり, 補部である。即ち, この前置詞句は VP の一部である。Hornstein-Weinberg (1981) の分析では, この前置詞句は VP の内部にあるのであるから再分析の適用が可能であり, 前置詞は残留できる筈である。しかし, 残留は不可能である。Hornstein-Weinberg (1981) の提案では, (23b) に対応する関係節において, 事実には反して前置詞が残留することを予測し, この前置詞句が必ず前置されるということを説明することができない。

長原 (1990) は, 自動詞, 形容詞に続く前置詞句が VP の内部にあるにもかかわらず前置詞が残留しない場合があると述べ, その表現と(24)の例を挙げている。¹⁾

(24) And I enjoyed his company, I liked hearing about the musical world, a world of which I was so ignorant that when he talked of it he seemed authority itself,

(25) It all came back to me, in one of those film-sequence sweeps of total recall to which I am subject. ²⁾

(26) apply for, fall in, be involved in, write of, be incapable of, be certain of, be ignorant of, be weary of, depend on, hinge on, insist on, rest on, appeal to, apply to, approximate to, come to, conform to, plead to, over-react to, reply to, respond to, subscribe to, be unaccustomed (and uninitiated) to, be subject to, be indebted to, be unfamiliar to, be responsive to, be subordinate to, be relevant to, combine with, sympathize with, be involved with

Hornstein-Weinberg (1981) の分析では, 再分析は随意規則であるからこれらの表現に再分析を適用しない場合は, (24), (25)に見られるような前置詞句が前置された例を派生することができる。従って, 長原 (1990) が述べているように, このような例は Hornstein-Weinberg (1981) の反例とはならない。しかし, やはりこのような表現の分析においても, 再分析を随意規則とするだけでは不十分である。

2.2.3. 前置と残留が可能な場合

長原 (1990) は, 前置詞の前置と残留のどちらも生じている表現とその例を挙げている。³⁾

1) 長原 (1990, p.166)

2) Margaret Drabble, *The Garrick Year* (Penguin Books), p.50.

3) 長原 (1990, p.167) (27), (28), (29)及び(30)はpp.10-11に記されており, それぞれ Rich-

(20)が示すように、関係節においても、前置詞句が前置詞とそれに続く前置詞句から構成されている場合には、その前置詞句は前置される。

長原（1990）は、様態、方法などの副詞としての前置詞句、即ち、in that manner, to that extent, with ease などの前置詞句は必ず前置されると述べ、次の例を挙げている。¹⁾

- (21) a. Vitamin D controls the manner in which bones grow.
b. People in the Western world have difficulty grasping the extent to which religion infiltrates all aspects of life in the Arab world.
c. Even more unfortunate is the slowness with which the concept of culture has percolated through the public consciousness.

荒木・安井（1992）が関係詞節において、前置詞句が頻度の副詞を形成する場合に、その前置詞句は前置されると記し、引用している次の例も同種の例である。²⁾

- (22) The rapidity with which infants acquire habits is amazing.

動詞を主要部（head）とする VP はいくつかの階層的な構造を形成しており、動詞の補部（complement）として機能する要素が動詞と共に最も小さな VP を形作ると考えられる。長原（1990）が指摘しているように、(21)に生じている前置詞句は動詞の補部として働いておらず、従って、最も小さな VP の外にあると考えられる。Hornstein-Weinberg（1981）の分析では、VP の外にある前置詞句は必ず前置されることになるので、(21), (22)の例については派生が可能である。しかし、Hornstein-Weinberg（1981）の分析は、VP の階層的な構造をとらえておらず、動詞を厳密下位範疇化する前置詞句は VP に支配され、時や場所を表わす前置詞句は動詞を厳密下位範疇化せず、文頭に前置されうるので、S に支配されると区別しているだけである。VP の内部の構造をより厳密に分析する必要がある。³⁾

長原（1990）は、次に、問題の前置詞句が補部として機能している例を挙げ、これに対応する関係節でも前置詞は残留できないであろうと述べている。⁴⁾

- (23) a. *Peter worded the letter.
b. Peter worded the letter in a thoughtful manner.

1) 長原（1990, pp.164-65）

2) 荒木・安井（1992, p.1120）

3) VP の階層的な構造に関する分析の詳細は、Takami（1987）,（1992）を参照。

4) 長原（1990, p.165）

- (16) a. This is a year in which the word “volatility” is the leading cliché. (長原 1990)
 b. *This is a year which the word “volatility” is the leading cliché [in t].
- (17) a. The surgery during which Harry died was experimental. (荒木・安井 1992)
 b. *The surgery which Harry died [during t] was experimental.
- (18) a. The tower on which the sign was seen was the tallest.
 b. *The tower which the sign was seen [on t] was the tallest.
- (19) a. The city in which the man slept in the oak bed for three days in a row was New York.
 b. *The city which the man slept in the oak bed for three days in a row [in t] was New York.

(16), (17)は時を表わす前置詞句の例であり, (18), (19)は場所を表わす前置詞句の例であるが, いずれの前置詞句も関係節においてSに支配され, VPの外に生じている。いずれの例においても, これらの前置詞は残留できない。Hornstein-Weinberg (1981) の分析に従えば, (16b), (17b), (18b), 及び (19b) において, 残留した前置詞に統率されたそれぞれの痕跡は格標示規則によって, 斜格が付与され, フィルター(5)によって非文とされ, 適切に排除される。即ち, Hornstein-Weinberg (1981) の提案は, 関係節内のVPの外に生じる前置詞句が必ず前置されることを説明するものである。¹⁾

長原 (1990) は, 前置詞が前置詞句を従えて作る前置詞句はいかなる形にも分解されないと述べ, 疑問文の例を挙げている。²⁾ では, 関係節ではどうであろうか。

- (20) a. The table from under which John took a box was solid.
 b. *The table under which John took a box from was solid.
 c. *The table which John took a box from under was solid.

1) Takami (1992, p.14) は, Hornstein-Weinberg (1981) の予測に反して, 疑問文において, 時や場所を表わす前置詞が残留できる次のような例を多数挙げている。

(i) a. What day did she arrive [on t] ?
 b. Which World War did John lose his arm [in t] ?
 (ii) a. Which city did the president make his inaugural speech [in t] ?
 b. Who did Marry sing the song [in front of t] ?

2) 長原 (1990, p.164)

長原（1990）は、自動詞あるいは形容詞の後に前置詞が続く場合も(13)のように必ず前置詞が残留する場合があると述べ、(15)を挙げている。¹⁾

- (13) This was the first thing they thought of.
- (14) Somehow the evolutionary leap which we are talking about seems to be quite a big one. ²⁾
- (15) complain about, hear about, know about, read about, talk about, speak about, think about, write about, glance at, guess at, laugh at, look at, aim for, ask for, care for, wait for, long for, believe in, participate in, be engaged in, disapprove of, dispose of, speak of, think of, be proud of, be sure of, count on, decide on, look on, touch on, disagree on, get to, get on to, hold to, object to, react to, shout to, turn to, be subjected to, agree with, cope with, dispense with, tamper with, become involved with

(15)のような表現についても、再分析が必ず適用されるとすれば、前置詞は必ず残留することになり、事実合致した記述はできる。しかし、なぜこのような表現だけに必ず再分析が適用されるのかは説明されない。即ち、Hornstein-Weinberg（1981）の分析は、これらの表現における前置詞残留の例文は派生できる。しかし、それだけでは不十分であり、本当に説明したことにはならない。

2.2.2. 必ず前置される場合

Hornstein-Weinberg（1981）の提案では、関係節内の VP の外に生じる前置詞句は必ず前置されることになる。関係節内の VP の外に生じる前置詞が wh 句に随伴 (pied piping) して前置されなければ、即ち、残留すれば非文となる。では、関係節内の VP の外に生じる前置詞が残留できるかどうか見てみよう。

1) 長原（1990, pp.162-63）

2) 荒木・安井（1992, p.1120）は、関係詞節においては、関係代名詞が as, that, ϕ の場合、前置詞残留が義務的となると述べ、次の例を挙げている。

- (i) a. such things as we are sure of
- b. the things that we are sure of
- c. the things we are sure of

しかし、この例文(14)が示すように、which も前置詞が必ず残留する場合に生じることができる。この例文は、Noam Chomsky, *On the Generative Enterprise : A Discussion with Riny Huybregts and Henk van Riemsdijk* (Dordrecht : Foris Publications, 1982, p.22) からの引用である。

take advantage of, take objection to のように前置詞が前置できるものもあると述べている。¹⁾

- (9) The only offer of which I plan to take advantage will give me an eleven-month paid vacation.
- (10) The scenes to which the censors took objection had to do with the mixed marriage of a snail and a giant panda.

又、Ross (1968) は、前置詞の前置を許す take advantage of などの慣用句では、(11)のように2つの受身形が可能であるのに対して、前置を許さない get hold of などの慣用句では、(12)のように1つの受身形しか許されないという相関関係がほぼ成り立つとも述べている。²⁾

- (11) a. Advantage will be taken of his offer.
b. His offer will be taken advantage of.
- (12) a. *Hold has been gotten of some rare old manuscripts.
b. Some rare old manuscripts have been gotten hold of.

長原 (1990) が指摘しているように、受身形と前置詞前置及び残留の相関関係が完全ではないかもしれない点で問題があるのであるが、随意規則である再分析を(6)のような慣用句には必ず適用し、take advantage of, take objection to などには適用してもしなくてもよいとすると、事実に合わせた記述はできる。即ち、再分析が必ず適用される(6)のような場合には、再分析された複合動詞の目的語の名詞句を主語とする受身形しかないが、take advantage of などの場合には、再分析が適用されないと、(11a)のような受身形となり、適用された場合、再分析された複合動詞の目的語の名詞句を主語とした(11b)のような受身形となり、2つの受身形の派生が可能である。

Hornstein-Weinberg (1981) の再分析による(6)のような慣用句の分析は、事実を記述することができる。しかし、長原 (1990) が述べているように、再分析を単に随意規則とするだけでは不十分である。即ち、再分析を随意規則としながら、(6)のような場合には必ず適用しなければならない、一方、take advantage of などの場合には適用してもしなくてもよいとしなければならない点において不備であり、前置詞残留の事実を本当に説明したことにはならない。

1) Ross (1968, pp.217-19)

2) *ibid.*, pp.220-22.

(1981) は、このような仕組みで、VP に直接支配される前置詞句の前置詞残留の文法性と S に直接支配される前置詞句の前置詞残留の非文法性を説明している。これまで概観したのは疑問文の例であった。Hornstein-Weinberg (1981) は、関係節に現われる前置詞残留に関しては言及していない。しかし、前置詞残留の制限は関係節においても同様に働くと考えられているので、Hornstein-Weinberg (1981) が提案する普遍文法の仕組みが関係節における前置詞残留の事実をどのように説明するのかを次に検討していく。長原 (1990) に基づき、英語の事実即して見ていく。

2.2.1. 必ず残留する場合

長原 (1990) は、Ross (1968, pp.217-222) に基づき、動詞に不変化詞 (particle)、形容詞、動詞、名詞 (句) のいずれかが続き、その後には前置詞が続いて(6)のような慣用句 (idiom) を成す場合には、(7), (8)に見られるように前置詞は原則として残留すると述べている。¹⁾

(6) do away with, make up to, sit in on, get away with, make light of, make sure of, make do with, let fly at, let go of, lay claim to, hold sway over, pay heed to, get wind of, set fire to, lay siege to, lose track of, take charge of, get the drop on, make no bones about, set one's sights on

(7) a. The only relatives who I'd like to do away with are my aunts.

b. *The only relatives with whom I'd like to do away are my aunts.

(8) a. One plan which I got wind of was calculated to keep us in suspense.

b. *One plan of which I got wind was calculated to keep us in suspense.

Hornstein-Weinberg (1981) が提案する再分析は随意規則であるが、(6)のような慣用句には必ず適用するとすれば、これらの慣用句に現われる前置詞は複合動詞の一部となり、必ず残留することになる。従って、これらの慣用句に生じる前置詞は必ず残留するという事実を記述することができる。

しかし、Ross (1968) は、同じ形の慣用句であっても(9), (10)に見られる

1) 長原 (1990, p.160)

(3), (4)の構造の相違から, 前置詞句が VP に直接支配されている場合にのみ前置詞が残留でき, 前置詞句が S に支配されている場合には, 前置詞は残留できないことが明らかである。

Hornstein-Weinberg (1981) は, この前置詞残留における文法性の相違を普遍的なフィルター(5)と普遍的な再分析 (reanalysis) という統語規則を用いて説明しようとする。

- (5) * $\begin{bmatrix} \text{NP} & e \\ & \text{oblique} \end{bmatrix}$

(5)は, 痕跡のような語彙内容のない名詞句が格標示規則 (case-marking rules) によって斜格 (oblique case) を付与される場合に, その名詞句は非文法的とされ, 排除されなければならないことを示している。¹⁾ 普遍的な再分析の規則は, VP の領域 (domain) において, 動詞とその右にある任意の隣接する要素は複合動詞 (complex verb) を形成することができるというものである。(2)はフィルター(5)によって非文として適切に排除される。というのは, (2)の痕跡は前置詞に統率され, 従って, 斜格を付与されるからである。ここで注意すべきことは, 再分析は(2)に適用することができないということである。なぜなら, 再分析の適用は VP, 即ち, 動詞が構成素統御 (c-command)²⁾ する要素に限定されているからである。一方, (1)においては, 前置詞句が VP に直接支配されているので, 前置詞句に再分析を適用することができ, 文法的であるとされる。即ち, put his books on 及び talk to Harry about がそれぞれ複合動詞として再分析され, これらの複合動詞はそれぞれ痕跡を統率し, その痕跡に斜格ではなく, 目的格 (objective case) を付与するからである。又, 再分析は随意規則 (optional rule) であるとされている。Hornstein-Weinberg

1) Hornstein-Weinberg (1981) は, 格標示規則を次のように規定している。

- (i)a. NP is marked [+ nominative] if it is governed by tense, i.e. if it is marked the subject of a tensed sentence.
- b. NP is marked [+ objective] if it is governed by V.
- c. NP is marked [+ oblique] if it is governed by P.
- d. Wh-NPs are assigned the case of the closest trace which bears their index and which is in a possible Case position. Both the wh-element and the relevant trace are marked with Case. (pp.60-61)

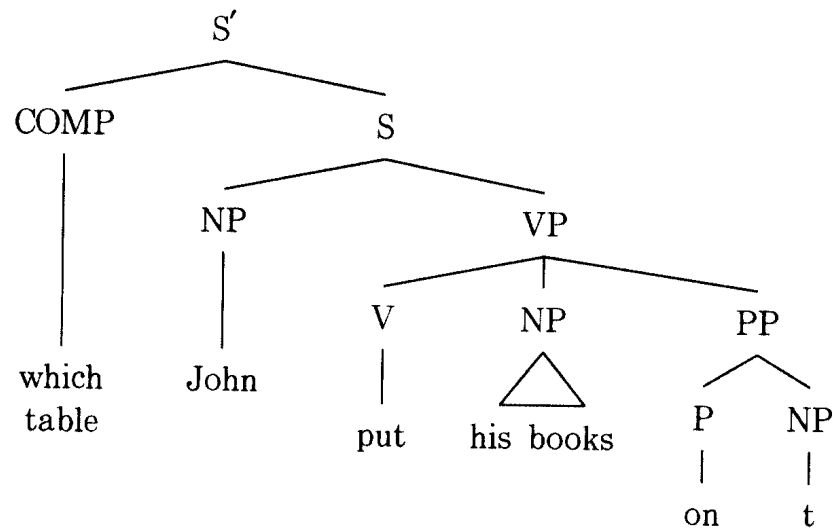
2) 構成素統御は, 次のように定義される。

- (i) 節点 A は, A を支配する最初の枝分かれ節点が B を支配する場合, 節点 B を構成素統御する (そして A は B を支配しない)。

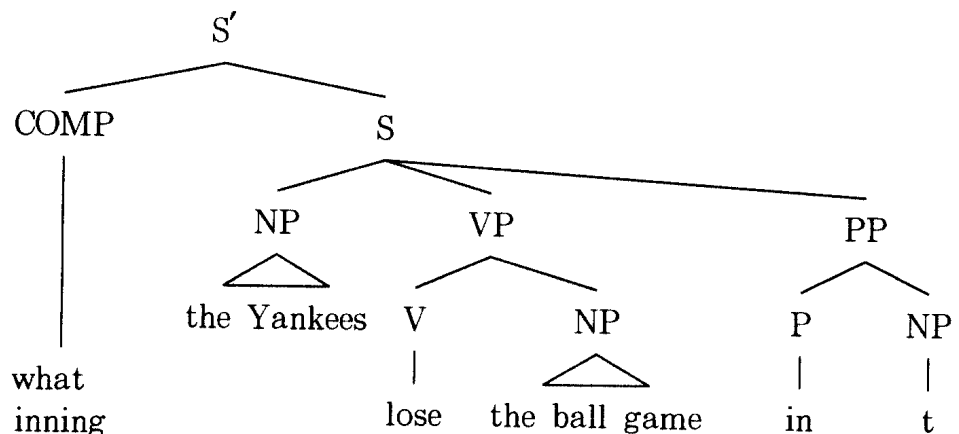
この定義は, Reinhart (1976) が最初に提案した定義と本質的に同じであり, Takami (1992, p.247, n.3) に基づく。

(2)は非文法的である。言い換えれば、(1)では前置詞が残留できるが、(2)では残留できない。(1)においては、前置詞句 ($[_{pp} \text{ on } t]$ 及び $[_{pp} \text{ about } t]$)¹⁾ が節点 VP に直接支配されているので、前置詞残留は VP において生じている。(2)においては、前置詞句 ($[_{pp} \text{ in } t]$ 及び $[_{pp} \text{ in } t]$) が節点 S に直接支配されているので、前置詞残留は S において生じている。Hornstein-Weinberg (1981) は、(1)に見られるような、動詞を下位範疇化する前置詞句は節点 VP に支配されているのに対し、(2)に見られる時や場所を表わす前置詞句は節点 S に支配されていると考えている。(1a) と (2a) は、それぞれ(3), (4)で示される構造をしていると考えられる。

(3)



(4)



1) t は、wh 句 (*which table* と *who*) 移動の後に残された trace (痕跡) を表わす。

関係節における前置詞の残留と前置

佐 保 玲 子

1. 序

英語において、関係節の空所 (gap) が前置詞の目的語である場合に、限られた条件の下で、この目的語が前置され前置詞残留 (preposition stranding) が起こる。Hornstein-Weinberg (1981) は、普遍文法の観点から前置詞残留を説明している。しかしながら、Hornstein-Weinberg (1981) が提案した分析には難点がある。

本稿は、Hornstein-Weinberg (1981) が提案する前置詞残留の分析を関係節に現われる前置詞残留に適用した場合の問題点を考察するものである。関係節における前置詞残留及び前置詞前置の英語に関する事実は、主として、長原 (1990) に基づく。

以下、第2節では、Hornstein-Weinberg (1981) の分析を概観し、その問題点を明らかにする。第3節では、それらの問題点を解決と思われる新たな分析を検討する。

2.1. Hornstein-Weinberg (1981) の分析

次の例文を見てみよう。

- (1) a. Which table did John put his books on?
b. Who did John talk to Harry about?
(Hornstein-Weinberg 1981)
- (2) a. *What inning did the Yankees lose the ball game in?
b. *Which city did you sleep in your bed in?
(ibid.)

いずれの例文においても前置詞が残留しているが、(1)は文法的であるのに対し、